

## おじいさんと孫まじ

昔むかし、あるところに、とても年とつたおじいさんがいました。おじいさんは、ひざがふるえてうまく歩くことができませんでした。耳も聞こえないし、目もよく見えません。そのうえ、歯はもありませんでした。食卓しょくたくの前にすわっても、スプーンをちゃんどにぎることができないので、スープをテーブルクロスにこぼしたり、食べ物を口からこぼしたりしました。

おじいさんの息子と、息子のおかみさんは、それをとてもいやがりました。そして、とうとう、おじいさんを部屋のすみの暖炉だんろのかけにすわらせることにしました。そして、素焼きすやのお皿に食べ物を入れて、おじいさんにあたえました。それも、ほんのちよっぴりでした。おじいさんは、いつも、悲しそうな目で食卓のほうをながめていました。

あるとき、おじいさんは、手がふるえて、お皿をしっかり持っていられなくなりました。お皿は床ゆかに落ちてわれてしまいました。息子のおかみさんは、おじいさんをしっかりとばしました。おじいさんは、ひとこともいわず、ため息をつくばかりでした。

息子夫婦は、おじいさんに、そまつな木のお皿を買ってきて、それで食べさせました。あるとき、息子夫婦が食卓についていると、四歳よっさいになる小さな孫まじが、床で、小さな木切れを集めていました。父親が、

「おまえ、そこでなにをしてるんだ」ときくと、孫はいいました。

「おわんをこしらえるの。ぼく、大きくなったら、これでお父さんとお母さんにごはんをあげるの」といいました。息子夫婦はしばらく顔を見合せていましたが、たまらなくなつてわっと泣きなだしました。そして、すぐに、おじいさんを食卓につれてきました。

それからというもの、いつもおじいさんもいっしょに食卓をかこむようになりました。そして、おじいさんが少しくらいこぼしても、何ももんくをいいませんでした。